

## Śṛṅgāraprakāśa におけるラサ論についての一考察

本 田 義 央

1. ボージャの著作 *Śṛṅgāraprakāśa* は、現存する諸々のラサ理論書・詩論書のうちで、最大の規模を誇るものである。その書名からもわかるように、Śṛṅgāra—ボージャはこれを *ahamkāra*, *abhimāna* とも呼ばれるという一を、唯一のラサとしてたてるところにその特徴がある。しかし、この書には、注釈文献が存在せず、Josyer ed. (1955-ca. 1969) が出たのち、校訂本が長らく刊行されなかったこともあり、Raghavan (1978) 以降、その研究は進展してこなかった。しかし、ながらく待たれた校訂本 Raghavan ed. (1998) が出版され、同じ年に Pollock (1998) が発表されるなど、ようやく Raghavan (1978) につづく本格的な研究のきざしがでてきたところである。

Raghavan (1978) は、説明するまでもないが、*Śṛṅgāraprakāśa* 全体を扱うだけでなく、個々の概念の歴史的展開、周辺の関連文献までもを網羅した、Raghavan 博士においてのみなした大著であり、ボージャの研究のみならず、インド文学、ひいてはインドの文化研究における必読書となっている。一方、Pollock (1998) は、ラサ理論の枠組みに焦点を絞り、*Śṛṅgāraprakāśa* 研究の新たな視点を提示した。Pollock の指摘は、簡単にいえば、*Śṛṅgāraprakāśa* におけるボージャのラサ論は、その枠組みを、今日ラサ論といえはそれを思い浮かべるとおもわれる、アビナヴァグプタに代表されるカシミールのラサ理論のそれとは決定的に異にするのではないか、ということである。この指摘は、*Śṛṅgāraprakāśa* 研究、ひいては、ボージャ研究における重要な視点を提供していると思われる。それだけに、Pollock の説にしたがって、本論文では、Pollock の主張を概観した上で、それを補強すると思われる資料をわずかながら追加してみたい。

2. Pollock (1998) の論点は、ラサをもつのは観客・読者なのか、それとも作品中の登場人物なのか、いいかえればラサを経験するのは誰か、というラサ論の根本的な枠組みの問題に関わる。この問題は、アビナヴァグプタが *Nāṭyaśāstra* に対する彼の注 *Abhinavabhāratī* において言及する彼に先行する論師たちの説にも異なる

る見解が見出され、詩論家達の間には様々な説があったことがうかがえる。たとえば、Bhaṭṭa Lolāṭa は登場人物と役者とに存するという見解をとり、Bhaṭṭa Tauta は登場人物、詩人、聴衆に共通であるという。Pollock の説は、ボージャの理論では、ラサはあくまでも作品中の登場人物にあるのであって、観客・読者にあるのではないのではないか、というものである。そして、ボージャの思想は、アビナヴァグプタに代表されるカシミールの思想家によって、ラサが登場人物に存するという考えが放棄され、観客・読者に存する、という考えが主流となったその影響をばなれて展開されたものではないか、というものである。

3. ボージャは、Śṛṅgāraprakāśa 11 章において、ダンディンがアランカーラの一つとして *Kāvyaḍarśa* 2, 275 にあげた 'rasavat' について論じる。'rasavat' に含まれる接辞 '-vat' は、所有接辞 matUP と類似を表す vatI のいずれの可能性もある。そして、それぞれに難点が予想されるが、ボージャはどちらに解釈してもよい、という。所有接辞とした場合、次のように説明される。

ラサを有する [人物である] (rasavat) ラーマなどの言葉 (vacana) は、[その人にある] ラサにもとづいている (rasamūlatva)。したがって [彼が語る言葉自体も] ラサを有する (rasavat)。そして、[実際のラーマなどの言葉と作品中の登場人物としてのラーマの言葉との間に] 不異性を仮構すること (abhedasamadyāropa) によって、詩人が [ラーマなどの] そ [の言葉を作品中に] 模倣するなら (anukriyamāṇa)、[それらの] 模倣物 (anukaraṇa) [である登場人物の言葉] もまたラサを有する (rasavat)。<sup>1)</sup>

ここでは、ラーマなどの人物がラサを有する。そして、そのラサにもとづいて発せられるラーマの言葉もラサを有する、とボージャはいう。さらに、作品中に詩人が描くラーマなどの言葉も、実際のラーマの言葉との間に不異性を仮構することによって、同じようにラサを有するというのである。

一方、類似を表す接辞とする場合は、次のようにいわれる。

この場合でも [接辞 vatI の意味が] あてはまらないわけではない。[X にふさわしいという意味で、二格でおわる語の後に vatI が導入される] (P5, 1, 117: tadarham) という [パーニニの] 言明にもとづいて、['rasa-' の後に] vatI が生起しうる。[すなわち] ラサを知らしめるにふさわしいものが rasavat である (rasān pratipādayitūṃ yad arhati tad rasavat)。そして、ラサを知らしめるにふさわしい (rasavat) [実際の] ラーマ等の言葉を [詩人が] 模倣するならば、[それらの模倣もまた、実際のラーマの言葉とその模倣との間に] 不異性を仮構することにより (abhedasamadyāropād) ラサを理解させるにたるから、ラサを知らしめるにふさわしい (rasavat)。<sup>2)</sup>

この場合も、ラサを有するのは、作中人物としてのラーマである。そして、その

ラーマなどの言葉は、彼が有するラサを知らしめるのにたるから、ラサを知らしめるにふさわしい (rasavat) といわれるのである。作品中に詩人が写すラーマの言葉も、先の場合と同じように、不異性の仮構により、ラサを知らしめるにたる。

それでは、rasavat といわれる具体例をみておこう。〈笑い〉という〈恒常的感情〉(sthāyibhāva) から、〈滑稽〉というラサがおこることを *Kāvya-darśa* 2. 289 を引いて説明する。<sup>3)</sup>

「友よ、彼のことをほんとに怒っているんだったら、あなたの両方の乳房のすそについているこのまあたらしい爪痕を上着でおかくしなさい。」

こ[の例]では、先に夫に抱かれてまさに彼によって乳房にまあたらしい爪痕をつけられたある女友達(甲)が〈抛り所となる条件〉(āmbanavibhāva) である。[その甲を]見たある女友達(乙)に〈笑い〉という〈恒常的感情〉がおこる。[その〈恒常的感情〉]彼女の抱擁を思い出すことなどという〈かきたてる原因〉(uddīpanavibhāva) によってかきたてられ、[なおかつ]〈憂慮〉(śankā)・〈感情の偽装〉(avahittha)・〈歎喜〉(harṣā)・〈吃ること〉(gad gada) などの〈一時的感情〉がおこるとき、最高潮に達した後に (paraprakarsādhigamā), 〈恒常的感情〉が〈滑稽〉というラサとなる。そのとき、「友よ、彼の…」云々という言葉は、〈滑稽〉というラサからおこるので、rasavat といわれる。

ここでは、ラサを有するのは、滑稽さを感じている女友達(乙)である。ボージャは同様の例をいくつかあげるが、この点に関してはいずれも同じであり、観客や読者という視点は含まれていない。

4. さて、最後に、ボージャの次のような言葉をみておこう。<sup>4)</sup>

あるいは、文学作品 (prabandha) において、[ラサが] 大詩人たちによって適切に表現されるならば、[そのラサを] 賢者たちは理解する。その場合、物事 (padārtha) は、知覚によって理解されているときには、言葉豊かな人々 (vāgmin) の言葉によって伝えられているときほどには好ましくない。すなわち、[次のように] いわれている。「特定の対象は、目でみられたときには (dr̥ṣṭa), すぐれた詩人たちの言葉 (sukavivacas) によってうまく語られたときに開く (unmilanti) ようには、心の開花 (cittavikāsa) を起こさない。」したがって、役者 (abhinetr) よりも詩人 (kavi) たちこそ、そして、上演 (abhinaya) よりもカーヴィヤ (kāvyā) こそ、私は重きをおく。

ここには、役者よりも詩人を、上演よりもカーヴィヤの作品自体を重視するボージャの態度が表明されている。役者や上演をまったく無視する訳はないこともわかるが、しかし、作品重視のボージャの姿勢が、彼のラサ理論に反映した結果として、ラサをもつものは作品中の登場人物であり、読者や観客ではない、という考えに結びついていると考えられる。現時点では、*Śṛṅgāraprakāśa* 研究は、冒頭に

も述べた通り、まだまだその端緒についたばかりであり、関連資料の整理翻訳とともに、Pollock の指摘したような、根本的な観点からの研究が継続されるべきであろう。

---

〈文献及び略号〉

- Josyer, G. R. ed. 1955-ca. 1969. *Śṛṅgāraprakāśa of Bhoja*. 4 vols. Mysore: Coronation Press.  
Pollock, S. 1988. Bhoja's Śṛṅgāraprakāśa and the Problem of Rasa: A Historical Introduction and Annotated Translation. *Asiatische Studien/Études Asiatiques* 52, 1: 117-192. Raghavan, V. 1978. *Bhoja's Śṛṅgāraprakāśa*. Madras: Punarvasu. Third edition (second edition, 1963).  
Raghavan, V. ed. 1998. *Śṛṅgāraprakāśa of Bhoja*. Part 1. Harvard Oriental Series 53.

- 1) R 676 17-18. この箇所については、Pollock (1998, 127) がすでに触れている。 2) R 676. 19-21. 3) ここにみられる、〈滑稽〉などをラサとする考え方は、Śṛṅgāra を唯一のラサとするボージャの最終的な立場とはことなる。 4) R 5. 17-6. 7

〈キーワード〉 Bhoja, rasa, alankāra, rasavat, Pollock,

(広島大学助手, 大学修士)